



芭蕉文集

丑



万菊丸	一枚起請	曲水	架木	千部
其合	正秀	雲竹	正秀	松風
丸柳	岩水	許六	俣木	梅丸
荊口	遺状	遺物		

芭蕉翁文集卷之五

いふありてつ使も去清在るは渡海の船や  
 おくはきりん病室やありはるるんを  
 方寸の碎れいんるれをも名古屋に  
 舟小出さるるる方推量もいんり山物者も  
 霜月末南都祭少禮見物——て膝下小  
 出波来り歳旦京ちりり紀ふ



ふも沢あて誰人のます花の春  
や

初時白撥も小養と月一り也

山中け子まと梅子

初音小鳥の波乃盤作き

南部

高出ーら大沸入る鬼母

京めく餅やさのま

長唄乃養もろろろ餅北

歳書

何れけ師走乃市小川馬

急便ありぬ山正二月之る伴かえ(湯城)

待物京七もし中斗山

正月十七日

とせ成

万菊丸柳

わが身は——我れふとら——わが下戸達乃  
はは——さうさうとら——あはれに  
又からんとらひ茶とのそそのりる酒  
あしつ——す只性生極樂のあはれあを  
南々河院佛とて——うらひなき性生  
と酒ととあひとりて——盃けむらひ  
別の子細きゆらけ但之飲は性の子細き性

中——その酒高もあはれ——てあはれ  
酒青味あはれとあはれ——あはれ  
以外小奥あはれとあはれ——二つあはれ  
あはれ性あはれとあはれ——あはれ  
人あはれとあはれ——あはれ  
あはれ性あはれのあはれ——あはれ  
あはれとあはれ——あはれ  
あはれ酒——あはれ

そ朝親まほ化のうゝ思むさるゝ今許ま  
御也筆下あてかけよもうて床か  
道まのりありし西白御化もちり  
写しあまもまをた〜大酒とせしれ  
ゆ〜そ御文句と〜てち御御  
そん〜の仍一句

朝親のあまの飯食男の形

い〜し〜き事〜をぬては月小か

着〜下りあひ

十日

長角丈

前文略

い絲くといふいもきてし程喰あ〜ん  
旅のやうりとこ海〜春ら居心と候〜

何つらぬ旅の心や並火燃

又烽火の消や〜す臘月すゑ京都と

遠しか乙列新尾も春とまらちて

人み家との火せて、あゝ年を

二日と関と題正月日

六漆袴の弟のち〜あゝ何佛

今年、分別のち〜こ〜名低〜

いそ〜蔵旦か〜ひ〜い〜ゆ〜ち〜朝

あゝ

正月入日

いそ

曲水

10  
遠るかにけりてしるるふかほのほのほ  
一句

我衣かきし思の

柳の糸せし

いふ中かきし思の糸一糸一糸  
いふ中かきし思の糸一糸一糸  
いふ中かきし思の糸一糸一糸  
いふ中かきし思の糸一糸一糸

思の糸  
思の糸

思の糸

貴雲厚好いしりし事  
いふ中かきし思の糸一糸一糸  
いふ中かきし思の糸一糸一糸

一思句もえみその句

辛漬乃松を花より朧めし

とゆそんつらふ

山信身そ信ち  
山信身そ信ち  
山信身そ信ち

之介云白く青くはるかに  
下りし

一 此の世に於ては  
その中乃の如く  
からふ以縁と好愛  
急る能く清く  
急る能く清く

一 其の角に於ては  
風雪地  
及ま

之の如く  
清く

一 此の世に於ては  
其の如く

六月十二日

芭蕉

千那





音

とを成

其の音文

伊芳能厚深く相見しつゝいふは老母様  
の心もすめりさきさきのゆかりをいふは  
お母様も病氣暖氣おまゝこゝろかへり

改定ならすてお母様

一 乙羽江戸音舟端し申出候おのて文名  
品方よりしや紙張のたてとらふおの  
物者もお城よりしひ難き

一 奇仙おゝ感吟かよか月とまそひとら

一 ちのちの風雅勢入る別れを  
波にりまゝえしとていふは  
うらりと同名の草をわすの事

大勢入は向ら出勢に批判の志を以てす  
跡ある所はしゆんて成りては

一 同名方(法)の少くを以て法茶一袋者

一 種は直(茶)は茶の志類あるは茶

物者考の既しるし

一 粟津茶の爲の事(茶)は法深切し

一 茶の(茶)は茶の法深切し

一 茶の(茶)は茶の法深切し

一 茶の(茶)は茶の法深切し

一 茶の(茶)は茶の法深切し

一 茶の(茶)は茶の法深切し

一 茶の(茶)は茶の法深切し

一 茶の(茶)は茶の法深切し

一 茶の(茶)は茶の法深切し

一 茶の(茶)は茶の法深切し

一 風雅は法深切し

やせんらねん九信の人さくもて世ひか  
らぬと海ふ心信しあへて成る及肩  
光あし眼出佛のさるか一信法及山何  
角五をまひらてんていふやりゆかゆと

二月十日

芭蕉

山秀雅丈

宗善院寺坊今白上系舟中上白  
山別系云く式形度及山梅を先代山類  
中下類字あるかソい信に法度一  
法度及山方細さ山梅一上系と山梅  
山山法にもある相又山く山形中下白  
字文来月申ふ山山山山山山山山山

心藏十部類の先住く候き度毎せう  
ほくせうの山中に居るひかひか一句  
時を鳴るや ありて 現る  
うと思ふは代ありて 候る候  
糸にて可成り居る候

十日

しせ銭

小向雲行相

着るや行ふるや候る候るのさうさう

あふはとつとと兼武斗とて  
かの種とんせんとして 石とあり  
おつてきく炭薪とて 候  
以てふ候海におきかき候下り候  
賜得る中へ此とて 候  
一は柳や葉田より 庭よりさして 候

ゆゑか久見あくまきき

之八月十日

芭蕉

心秀様

心秀様

心秀様

二月十日

ゆゑか久見あくまきき  
ゆゑか久見あくまきき

一 書状加列金法一 ありし中  
ゆゑか久見あくまきき  
ゆゑか久見あくまきき







水泉小謀足世より一法有哉

此是此書の今日幸く使はるる所なり  
法統より此の行末事より此の時  
下より此の愚者なり時より此の  
以爲書なり及此の教の正法

抄言

と世に

明石の水板

時、素素堂松風は此の書に由る  
少くも且其角と法統より此の書  
由るを此の書なり此の書は此の書  
字感心ありあり

菊鶴頭切法より此の書

市に忠信

と世に

保生館を更へん吟心

乞の石れ有る高くて早か

が将あり瓦のふれ候様あり

土の重き菜園あり地ひ

菊の香や庭よりまきまきから

野鳥と云ふの口吟心

金屏の松あり古きまわりの観

松原へ地身と成るまゝの追分地蔵あり

のまはれ月と成るまゝの追分地蔵あり

高き松あり地蔵と成るまゝの追分地蔵あり

高き松あり相の石と成るまゝの追分地蔵あり

高き松あり石と成るまゝの追分地蔵あり

高き松あり石と成るまゝの追分地蔵あり

高き松あり石と成るまゝの追分地蔵あり

高き松あり石と成るまゝの追分地蔵あり

山状のこゝに大垣を越くといふ  
神皇の御孫の御孫の御孫  
乃ちあはれいゆりてゆけり  
乃ちあはれいゆりてゆけり  
乃ちあはれいゆりてゆけり  
乃ちあはれいゆりてゆけり  
乃ちあはれいゆりてゆけり  
乃ちあはれいゆりてゆけり  
乃ちあはれいゆりてゆけり  
乃ちあはれいゆりてゆけり  
乃ちあはれいゆりてゆけり

日やり小らひて下らば  
世に能く使はるる  
こととす  
かゝる

十月九日

しんせ

評六雅文

世の中を清く持たし下りてはまこととまことと  
ふ日よあはれす 清くあはれぬ心を  
清く思ふは清く下りては清く思ふ  
清く思ふは清くあはれぬ心を  
清く思ふは清くあはれぬ心を  
清く思ふは清くあはれぬ心を  
清く思ふは清くあはれぬ心を

清く思ふは清くあはれぬ心を  
清く思ふは清くあはれぬ心を  
清く思ふは清くあはれぬ心を  
清く思ふは清くあはれぬ心を

馬方志 時局の大井川

世の中を清く持たし下りてはまこととまことと  
ふ日よあはれす 清くあはれぬ心を  
清く思ふは清く下りては清く思ふ  
清く思ふは清くあはれぬ心を  
清く思ふは清くあはれぬ心を  
清く思ふは清くあはれぬ心を  
清く思ふは清くあはれぬ心を

十月廿二日

とせ成

仙球文

何事新八去年此去身出うらむを  
又梅ありわとくせうしつる

梅の香むひしれ一子のぬきく

武陵芭蕉

一葉のまゝくまぐりてしつ

立こぬ歌の身とあひやう

二月十日

梅九人

時を分換るや水のこ 聲も様あり  
一夢の如く換るや時を氷を橋て白鳥  
横空の字換白眼をくくや雪の  
化つれもやと推存那も水は浪を  
は流と云との中をまきふるふ かし相定の  
ころせとけれとむいと云

は日横空の句文子射して有る時を  
句量もいしーかたはまきし 水のま  
換る水のよとくつ流ていもるくのま  
よ流しはて方れあひつてはまきの宗  
尸もいといつてはまきの宗もまきし  
新飲のすまものまきまき水もろり聲  
よ流しはて方れあひつてはまきの宗  
はまきの宗もまきし 水のま

味合山抄傳の巻下

下巻

荆白文

前文略

何と申すか、  
ちのひはともなほのや、  
もほり時をわたりて、  
とくは口時々の信

以下由者

菊のあてふ  
又酒壺の印の

かきし

一庫ありて野あり入るやふり

又十音位をり市小訪あり一合中

しと川ありあかきり

殊かあり別かとも

九月廿四

しそ

西考

至身方一人はる

は清きま

之風美、地を

下地、を

原中山

管白

仍て



ほろろとに二月梅の花さけり

ほろろとに梅の花さけり

まかせや合まきり梅の花さけり

いつて雪うり合まきり梅の花さけり

の

し

小雲竹梅

あけしつらと梅の花さけり

あけしつらと梅の花さけり

あけしつらと梅の花さけり

あけしつらと梅の花さけり

あけしつらと梅の花さけり

あけしつらと梅の花さけり

あけしつらと梅の花さけり

何れも雨をせぬか、かの斗小、於此の事と  
寂より是と藏且、乃、存然あり、わが事、好  
ひて、か、ハ、情、と、世、  
甲斐、ある、世、せ、  
一、幻、燈、店、上、昔、は、  
う、現、世、の、沙、汰、お、し、  
折、の、情、え、  
此、の、一、ま、の、情、高、の、曙、と、  
一、風、雅、の、道、筋、た、る、世、上、  
一、息、え、よ、  
又、す、  
一、情、を、  
一、情、を、  
一、又、  
世、と、  
世、と、

一、幻燈店上昔は  
う現世の沙汰おし  
折の情え  
此の一まの情高の曙と  
一風雅の道筋たる世上  
一息えよ  
又す  
一情を  
一情を  
一又  
世と  
世と

一、風、雅、の、道、筋、た、る、世、上、こ、の、等、お、お、  
一、息、え、よ、  
又、す、  
一、情、を、  
一、情、を、  
一、又、  
世、と、  
世、と、

一、風、雅、の、道、筋、た、る、世、上、こ、の、等、お、お、  
一、息、え、よ、  
又、す、  
一、情、を、  
一、情、を、  
一、又、  
世、と、  
世、と、

目取に事なきは是れ其元勝らむもの  
徳にす有らむものも志ありていふ  
いふは一事なきは又そのかゝる事  
交かれ居るは又事なきは事終て  
昂然と其の事なきは梅みわ年の  
うらみなきは事なきは料理を  
酒を飽やせめて食なるもの  
たゞたに其者を肥しむ事なきは  
疾より一筋なきは又志をばし免  
情をあくは事なきは地乃是水と  
さしに事なきは事なきは念を  
事なきは事なきは事なきは標り  
西の心術をたどり樂天の勝を洗ひ  
杜の、方す小入や、り所不都  
かゝる十の指なきは事なきは  
事なきは指なきは事なきは

酒の味はしをよむ

一説に酒をよむとて大坂にて還信しし者

推考ししに主志之年以前より

目しる事りゆりて強ふたしゆを

西河能同りまの〇〇〇〇〇〇〇〇

平生の人ありて此をよむに〇〇〇〇

りすし何乃不きありて有りゆり

於由者ハあはれはるゆり候ゆり

風糖のたしはよめりてむり

よりゆりてり

とせ成

曲水梅

け書々え縁りしり先之申年々

酒の年々

主中蔵

人と思ひしや境のりし梅

全圖の鑑

年々や後よりなる様の西

坊か門てうけりぬ主申れ置置少なる  
か様の欲甚のりて武乃深川中流に  
せしとやえりし書物小名張の何りて  
甲斐らるる心成なりと少のそは公の鏡の如  
なり

東花坊書之

前文畧

一 概隣りるは相初より暑氣之節短取  
と云 會し心のみく少をぬり多敷の松風  
る冊心小そりいさら松井実とて伊はと先  
しとゆりしとぬん東放他借師りり  
舟の事一舟門他借師はひつと  
物不場うけりなる松よの柳子院  
のりりしとやいしとぬり毒ゆりぬる



六川外より也。有乳不... 柳... 湯... の

二月八日

柳吉

伴多甫柳

あ〜思ふ中よ〜  
てい板の...とゆふ...せのそり

妻より七月述し沙汰起... 遊... 柳吉

遊... 柳吉

遊... 柳吉

一物有先んハ... 長の妻と... 漸  
秋立の... 秋寒乃... 好しい  
也と秋... する... 善言... 下中  
是れ... 少くも... 即氣... 成... 一... 進

一物有先んハ... 長の妻と... 漸  
秋立の... 秋寒乃... 好しい  
也と秋... する... 善言... 下中  
是れ... 少くも... 即氣... 成... 一... 進

一物有先んハ... 長の妻と... 漸  
秋立の... 秋寒乃... 好しい  
也と秋... する... 善言... 下中  
是れ... 少くも... 即氣... 成... 一... 進



いままゝの符難き他日んは成りし  
道牙家え遠方の句たて成りし  
法住のしゝゝゝ成りし  
駭河可酒店少て指守屋十は徳の  
家え仔細を七ゝ成りし  
清良右取度山子母林の集は成りし  
乃のゝ家え人の他端一巻下ゝ成りし  
と方筋別度成りし  
けりしは成りし  
概清成りし  
と成りし  
成りし

九月十日

とせ成

杉風権

遺物之部

一 仔細清之中山當年八集員中一在急之  
山界形 西流也此礼と稱の度之是也  
中云此山二人一之の月十方と云ひ  
一 細多之千手山也此老老と清也  
其如之然り等て書す

一 此山老々此山此山切生る此山後  
那志の

一 此山此山此山此山此山此山此山此山  
此山此山此山此山此山此山此山此山

一 此山此山此山此山此山此山此山此山  
此山此山此山此山此山此山此山此山

一 此山此山此山此山此山此山此山此山  
此山此山此山此山此山此山此山此山

一日書一と可也

元禄七年十月

支考は為ふ。御勢も深切定むと云ふ  
は原頼朝の廟の佛八刻の影の事と云  
ふ也

と世成平

一杉風入中合水く以名志死後斗之と  
那高也。あそ忍りし前より其果也  
あしそ気水事。在風雅也知を後  
しよの

一渭子中合水く以名志死後斗之と  
那高也。あそ忍りし前より其果也  
あしそ気水事。在風雅也知を後  
しよの

此所乞とありて是は水車に任風箱  
 此と云ふ老後子くは樂下と云  
 一風箱と云ふて門人方より持歸乞  
 中は借ハ乞後の多の〜〜〜  
 忘有る方と云ふ且つ角ハ此方と云居りこれハ

元禄七年十月

と云判

遺物之

一之日月日記

伴が少角

一各句書

日所

一埋本

一新式書入

是ハ杉風ハ〜〜〜  
 不寫ら〜〜〜

文章及故本

太ハ杉風方有る〜〜〜  
 支考〜〜〜

一 羽羽 屏中 氏々 名々の 屏儀 集丹 終命  
公羽と 爲るの 遠所て 了有は 杉風  
以乃れ 命

一 梅妻の 月夜 民夕 門也

一 古今の 二序 侍百人 一首の 和吹抄  
是ハ 支考ノ 下ニ 也

元禄七年十月

とせ 成判

